

綺麗佐賀県保育会

第62回 佐賀県保育事業研究大会

と き 令和6年6月8日(土)

と ころ 伊万里市民センター

主 催 佐賀県保育会

開会式 13:00~13:50

開会式は、伊万里市民センターを会場に370名、オンライン145名、合わせて515名の参加者が集い、実施いたしました。



(開会式)



(会長挨拶)



(表彰状の授与)

講演 14:00～15:30

演題 『乳児保育の質の向上は保育を高める』

講師 井桁 容子 氏

(保育 SoW ラボ代表 非営利団体コドモノミカタ代表理事 保育の根っこを考える会主宰)



講師の井桁容子先生は、保育実践研究施設の東京家政大学ナースリールームに42年間勤務され、東京家政大学非常勤講師も務め保育の実践及び保育者養成にかかわりながら研究に従事されています。保育現場から抽出した子どもの本質、質の高い保育の在り方、また、家庭支援・保護者との関わりについてお話された。

講演の冒頭には、今からの講演を聞いて、自分自身を振り返る時間にしてほしいと話され講演が始まった。

「子どもにあなたは優しいですか？あたたかいですか？」保育を行う上での原点を問われた。

乳児期の保育が増加している現在、保育士の合図で挨拶をして食べる、何かをする等、園で早く教え込むことをしていないだろうか。あかちゃんは様々な経験を通して学ぶようにできている。保育の中で、大人が考える正しいということだけを教えていないか。物理的に考えると、正しいことは人の数だけ正しいことがある。

子ども達の行動には理由があって、子どもの行動を汲みとり、子どもの思いを代弁し、相手に合わせたスピードで対話していくことが大切であり、0.1.2歳児の保育は人を尊ぶ保育を行わなければ、子どもが育たないと話される。

人は、動物に比べたら子どもの時代が長い、そこにも意味があるということ。手間暇をかけて保育をする底に愛が育つ、人格の土台を育む0.1.2歳時期の保育が、年長児の幼い行動、コミュニケーション能力に影響するといわれている。自分の気持ちを言葉にして伝えることのできない乳児期に、自分に丁寧にかかわってくれる人に巡り合うということの大切さを話された。

乳児保育を行う上で、科学的根拠に基づいた乳幼児期の理解の重要性が求められる。保護者対応をするうえでも、知識が大切になる。

子どもの成長、発達を知り、ひとり一人の子どもを理解して子どもや保護者に寄り添っていくことが、質の良い保育の提供、保護者支援につながり、子どもたちや保護者の方にとって園が安心できる場所になり、保育者自信が基地的な場所になるような環境づくりになることを、事例をもとに話された。

リーダーとは、自分はパーフェクトではないと自分の至らなさを受け入れることができる人、人に感謝して人から助けをもらうことができる人。無意識を理解し関わる事が出来る事が求められる。

これからの保育に大切なことは、比べない、個性の尊重、意欲だと話された。
being 保育を目指し、保育者自信が「美しい」なものを「美しい」と思えるように心を研ぎ澄ませていきたい。

(文責：立花保育園 主任保育士 友清妙子)

分科会① 15:45～17:00 (参加者 計 412 名 集合 283 名・オンライン 129 名)

演題 『乳児保育が保育全体の質を高める』

講師 井桁 容子 氏

(保育 SoW ラボ代表 非営利団体コドモノミカタ代表理事 保育の根っこを考える会主宰)



人はなぜ学ぶ必要があるのか？人間の脳は勝手にパターン化、デフォルメする癖があるから、思い込み・決めつけを見直し、イメージーションを働かせ、しなやかな思考ができるよう、また直感、本能、経験で解決せず、物事をよく見て、他者の話に耳を傾け、自分が正しいとは限らないという謙虚さを持つことが必要であると話された。

感情は3歳までに育つと言われている。安全が保障されている場所にいるのか、不安だらけの中で生活していくのかで、その後の心の育ちに影響していく。

私達保育者は、子どもが幸せに生きるためにその育ちを応援する専門家である。

人はみんな違うという理解が、コミュニケーションの基本であり、違うからわかるうとして、言葉をかける。言葉の単純化、平板化、パターン化、口先だけの保育は、コミュニケーション力を育てない。自分の思いを丁寧に伝えていく事が大切である。

自分自身の捉え方をポジティブに、考え方をかえると保育にいきってくる。完璧である事ではなく、うまくいかない自分も含めて生きていていいんだと思えることが、基本的信頼関係である。自分はどんな状態でも愛され生きていていいんだという事を子どもたちに伝えていかなければならない。

科学的根拠のある乳幼児理解の重要性として、正しい保護者理解の必要性、乳児期からの環境の重要性、アタッチメントの重要性がある。

保護者が困っていることを言える空気が保育者にあるということが大事であり、そのために、子どもの育ちや気付きを丁寧に伝えていく事、日々のやり取りを誠実に、頭ごなしでなく共感すること、保育者は謙虚に、保護者の背景を把握していく事が必要である。

人格形成の基礎がつくられる乳幼児期に関わる保育者は、子どもの安全安心の基地でなければならない。私たち保育者は継続的な関わりの中で子どもの特性の把握と理解、的確な洞察ができることが大切で、知っているという思い込みでなく、子ども一人ひとりをよくみて学び続ける事、子ども、保護者の背景を把握し、共感的で温かい眼差しと関わりを持つことが大切である。

感想

みんな完璧じゃないので、できないこと苦手なことがあっていい。わからないと言っていい、自分自身が完璧だと思えば見えなくなるっという先生の最初に言われた言葉がとても心に残りました。一人ひとりが違うからこそ面白く助け合えるんだと、とてもポジティブな気持ちになりました。 井桁先生 ありがとうございます。

(文責：たんぽぽこども園 藤瀬美樹)

分科会② 15:45～17:00（参加者 計 101 名 集合 86 名・オンライン 15 名）

演題 『今、マネジメント能力に不可欠なスキルとは？
～不適切保育・重大事故・不正等を予防・解決する園づくり～』

講師 関山 浩司 氏
(社会保険労務士法人こどものそら舎 代表)



1. はじめに～リスクマネジメント～

子どもたちが安心・安全に保育施設で過ごすために①不適切保育②重大事故
③不正等を予防するためのスキルを身に付ける。

職員同士の対話の重要性を述べられる。また、管理職として、労働条件及び職場環境の改善の取り組みが課題となる。

同じ視点だけで見ると盲点に気づかないことがあるため、いろいろなメンバーでいろいろな視点から「盲点がないか」「子どもにとってどうか」を第一に考える必要がある。

2. 不適切保育を予防するために取り組むこと

子どもの権利を大切にする保育、子どもにとって最善の利益とは何か。

子どもの立場に立って判断すべきことに、特に留意する必要があると述べられる。同じく不適切保育についても、望ましくない関わりであり（虐待等）子どもの立場に立っていないことにより起こる。虐待を放置することも不適切保育に含まれる。子どもの権利条約第12条に定められた、意見形成支援、意見表明権、意見聴取権、意見尊重支援に取り組むことが子どもの最善の利益につながる。子どもの声なき声を引き出す、キャッチャーがしっかり受け止める体制があることで、ピッチャーはボールを投げることができると、野球に例えられた。

子どもが意見をしやすい機会を確保し、尊重することが大切である。

3. 重大事故を予防するために取り組むこと

ガイドライン・マニュアルを徹底して、遵守した保育に取り組むように指導することや、職員間での情報共有をしっかりと行う必要がある。

また、外傷は出血で分かりやすいが、呼吸系（誤嚥・窒息）は分かりにくく、重大事故につながると述べられる。

再度、ガイドラインやマニュアルを自分自身、目を通して見直す点がないか常に最新の情報を職員とともに共有する必要がある。

4. 不正等を予防するために取り組むこと

園の職員同士、立場や年齢に関係なく、信頼・敬意・尊重の上で、意見が言える環境、“風通しと日当たりの良い環境”を整えることが重要である。

その取り組みの一つとして「ジワリホット」の紹介があった。仕事が忙しくなると「怒り」や「哀しみ」にばかり意識がいき、「喜び」や「嬉しさ」にフォーカスが当てられにくくなる。このワークを取り入れ視野を広げ、仕事のやりがいや手応えを実感できるようにする。各々、自分の保育を振り返り見つめ直し、誇りを持って取り組むことで、園全体の資質向上へとつながる。

5. おわりに～コンプライアンスに向けて～

“こどもの人権を大切にする”という考えを常に持ち続ける姿勢が大切である。

最後に「自分で自分を褒めましょう。」という言葉で締めくくられた。

感想

職員との対話では、立場や年齢に関係なく意見が言える環境作り、こどもとの対話では教えるより教わる気持ちで、保護者との対話では、自分に置き換え寄り添っていく心を忘れないようにと改めて感じました。

また、ジワリホットは、すぐに取り入れることの出来るワークなので、職員同士で共有し、自分たちの仕事にやりがいや誇りを持って保育に取り組みたいです。

（文責：大久保保育園 主任保育士 田中美絵）